

十九と三十三とは女の厄年、死なぬまでも必ず災難には遇ふといふ。何故かと調べてみれば、十九は重苦で、三十三は散々であるからだといふ。甚だ馬鹿げたことではあるが、之を眞實であると信じて居る人がある。殊に女の方に多い。總じて女の方は迷信が多い様である。熱心に神佛を渴仰するものは婦人に多い。わけても天理教、蓮門教などいふ迷信に近い宗教の信者は、多く婦人である。お闇を引くもの、賣ト先生の前にたつもの、家相を見て貰ふもの、御弊をかつぐもの、觀音・辨天、稻荷・不動等の前に平身低頭、合掌祈願するものは、婦人に多いであらう。勿論、教育を受けて居ると居らぬとによつて非常な相違はあるものゝ、

婦人と迷信

市川源三

教育を受けたもの同士、教育を受けぬもの同士の中で調べて見ても、矢張婦人の方が、男子よりも迷信に陥りやすいやうに思はれる。

いま、右の臘説を正確なものとして、何故婦人は迷信に陥りやすいのだらうと考へてみやう。然しそれを考へる前に、まず、すべて迷信に陥るのは、どの様な因縁理由によるだらうかを調べてみやう。

一、理に暗いもの、物の道理が解らぬものは迷信に陥りやすい、これは説明するまでも無からう然し、物の道理が解つて居ても、尙折々迷信に陥ることがある。又、それと反対に、理に暗いものでも迷信に陥らぬことがある、凡夫盛りに神祟りなしと曰ふ諺は、よくこの事實を示して居る。又、病氣になるか年が寄れば、とかく迷

信に陥りやすいものであるが、これは病氣になり老年になつて、知識が無くなり物の道理に暗くなつたわけでも無からう。又、切ない時の神頼みといふ諺がある。これも、理に暗い暗くなには關係が無いやうである。

二、獨立自主の傾向の少ないものは、迷信に陥りやすい、身躰も丈夫で無く、氣も弱いものは、とかく迷ふ。年が寄るとか、病氣にかかるとかすれば、その昔若いとき、丈夫であつた時、迷信だと嘲けつたことをも信ずることになる。又、氣の弱いもの即ち意志の弱いものは、強ひて自分の考へを仕上げやうといふ勇氣が無い、かういふものは、迷信とは知りながらも、つい、それに引き込まれて了ふ。例へば、鬼門といふことは、迷信であると思うて、斷然排斥して了へ

ば、所謂断じて行へば鬼神もこれを避くで、何のことも無いが、萬一意志が薄弱であると、それがため「理論上」、その様なことがある筈は無い、然し、世間で皆いふことであるから、或はさうかも知れぬ。萬一、不幸なめに遇うては、取り返しがつかぬ。又、世間の人も、そら見たことかと云ふであらう。さうなれば、少し位の不幸よりも、他人の口がうるさい」と、かう思うて、遂に眞の迷信に陥るやうになる。

三、客取り商賣するもの、これは、多く迷信に陥りやすい。商人は農夫よりも多く稻荷や不動を祀る、藝妓藝人は工女工夫よりも多く物忌み祈禱をする。これは、何故かといへば、自分の店の繁昌し、自分が利得を得るのは、單に物品を精選するとか、價格を低廉にするとか、客を親

切にすると、自分が餘分に働くとかによらぬことが多いからで所謂大當りといふのは、一つは運である。運は人力の得て左右出来ぬことであるから、そこで自然と神佛の力を借りる氣になるのである。その上怠惰者は汗水を流すよりは、御祈禱する方が樂であるから、ますく神佛に依頼する氣になるので、つまり怠惰者の神信心といふわけであらう。

四、すべて、何事でも、氣にする人は迷信に陥りやすい。喜怒に哀樂に切なものは、迷信に陥りやすい。人生は、もともと喜悲苦樂に満ちたものである。嬉しいと思へば、悲しいことも樂くなり、悲しいと思へば、樂しいことまで悲しくなる世の中。些細なことに頓着せずに暮すのが眞の樂天といふもの、それを何かにつけて

切にすると、自分が餘分に働くとかによらぬことが多いからで所謂大當りといふのは、一つは運である。運は人力の得て左右出来ぬことであるから、そこで自然と神佛の力を借りる氣になるのである。運は人力の得て左右出来ぬことであるから、そこで自然と神佛の力を借りる氣になるのである。その上怠惰者は汗水を流すよりは、御祈禱する方が樂であるから、ますく神佛に依頼する氣になるので、つまり怠惰者の神信心といふわけであらう。

五、度々失敗したもの、度々不運な目にあつたものなども、迷信に陥りやすい。これは、獨立自主の傾向を失うたからであらう。即ち失敗のかずくが人の自信を奪うたのであらう。

以上のべた所をつまんとする
凡て、理にくらいもの、氣の弱いもの、身體の弱いもの、氣の小さいもの、客取り商賣するもの、これらの人々は迷信に陥りやすい。とかういふことが出来る。

そこで、婦人に迷信の多いわけを説かう。
一、婦人は割合に理に暗い。のみならず、理窟を面倒がる。事物について潜思熟考するといふ根

氣が無い、一寸考へさへすれば、直迷信である。

と知れることを、かれこれ理窟をいふのは面倒だといふ。又、他人に聽いて見れば、すぐ誤解であると知れることでも、面倒がつて質問せぬこれが婦人の一般の缺點らしい。

二、婦人は獨り自ら意見をたてるといふことを不安心に思ふ、それ故、世間でいふことと聞けば一も、二も無く信する。婦人に流行を追ふものが多いのは、一つはこれによるのであらう。

三、婦人は自己の幸福を自己の手と足とでさめることが出来難い。所謂「一生の禍福他人による」である。この處は、客取り商賣するものが、迷信に陥りやすいのに似て居る。

四、婦人の身躰も弱く、その上、妊娠といふ様なことがわつて到底他の扶助を仰ねがばならぬ

位地に立つて居る。

五、所謂「妻は夫權に服従す」で、妻は獨立に考へ、獨立に行ふことが出来ぬ。これは、度々失敗した人の場合に似て居る。總じて女は人の妻となるべきもの、ならぬまでも妻となれるやうに教育されるものであるから、女には男ほどの獨立特行があるはずはないのである。

六、婦人は小さいことに氣を揉むものである。されど迷信に陥りやすい理由である。氣を揉むとの多いのは、つまり意志が薄弱であるのによるのだらう。但し、この點は婦人の本性か、それとも以上五項の結果であるか、研究をすることである。

要するに、婦人の教育と婦人の社會上の位地とを現在のまゝにして置いては、婦人に向つてその迷

信を嘲けるわけにはならぬ。わし、之を嘲けるならば、男はよほど譯のわからぬものといはねばならぬ。

A woman when thinking by herself is always thinking of mischief.

婦人の獨り思に沈むや、常に害悪とのみ思ひつくるなり。

よあ家庭

うばら

よあ家庭は少くゐのだとひふお話は、いつも私共の承はる事でだれもますが、どうかお互に氣を付けてよく致して行きたい事と存じます。それにつれて、こゝに記したことを考へますのは、私の友達の家庭の事でだれもします。

世間では間々子供といふるのは、學校や幼稚園で

こそ先生のいふことはよくわかるが、内では中々そういうかね、又そう行かぬのが至當であるといはれる方がありますが、なる程、家庭に於きましてはいろいろな事情がありますから、さへらか實行がむつかしいことしばしむびれはませうから、無論方法はちがへねばなりますまいけれども、學校や幼稚園で出来る事が、内で出来ぬ筈はないと考へてをりました。所が、今述べようといふ友達の家庭では、夫がまことに都合よく行つて居りましてかねて考へてをりましたことの證明が出来ましたことで誠に喜ばしく存しました。

そこで、先づ其家庭はどんなかと申しますと、今年十六になられる男のふ子さんを始めとして、二男、三男、四男と末に三つになる女のお子さんがります。御主人は職務がありますが大概毎日内に